

旧帝国図書館建築 100 周年記念セミナー 第 1 部「明治の近代建築」

平成 18 年 9 月 30 日

講師：米山 勇

こんにちは。米山でございます。よろしくお願いいいたします。今日のセミナーのメインのお話は、この後の坂本勝比古先生のご講演だと思えますけれど、私はそれにつなげるお話として、旧帝国図書館という非常にすばらしい、明治建築の集大成と言っても過言ではない建物がどのような経緯をたどってできたか、私は常日頃、この建物を「栄光の建築」と称しているわけですが、どうしてそのように呼ぶのかというお話は後ほどとしまして、その栄光の建築にどのようにして至ったか、明治という時代の建物の変遷といったお話をさせていただきたいと思えます。

グラバー邸

明治の近代建築というテーマです。近代建築というのは、世界的な視点で見ますと、非常に難しい意味を孕んでいる言葉ですが、通常日本において近代建築といわれているのは明治以降の建物です。正確には幕末から、明治、大正、昭和、戦前までということができますが、今日は、幕末から明治の建築を、今日というところの近代建築と呼びたいと思えます。近代建築というのは、それまでの、近世以前の建築に対して、近代建築というわけですが、これは端的に言うと、西洋の建築、洋風建築であったといっても大方間違いはないと思えます。では近代建築、洋風建築はどのような形で最初に

導入されたのかというと、現在も残るもので最も古いものに「グラバー邸」が挙げられます。スコットランド出身のトーマス・グラバーの邸宅として建てられたものです。長崎にあります。建ったのが幕末なので、最初期の近代建築、洋風建築の姿を今に伝えています。重要なのは、この「グラバー邸」の母屋といいますが、居室の周りに、ベランダといわれる空間が回っていることです。今ではベランダは、マンションにもあります。物干しという形で少し意味が変わってきていますが、本来は建物の中と外の間、緩衝地帯のような形で設けて、そこでお茶を飲んだり、場合によってはお昼寝をしたりする。西洋からやって来た外国人たちが、日本のような暑い、湿気の多い地域で暮らす中で生み出された知恵がベランダです。これを取り入れることから、日本の近代建築の歩みが始まります。

リンガー邸

同じく長崎にある「リンガー邸」は、「グラバー邸」の建っている高台の後方に建っています。これも幕末から明治初期の建物と考えられています。やはりここでもベランダが回っています。一つずつ、西洋の建物の造り方、形を学び取っていく。「グラバー邸」にしても「リンガー邸」にしても設計を手がけたのは、おそらく外国人。住み手のグラバーさんやリンガーさんの

意向が多分にあったと思いますが、そういったものから一つずつ学んでいく。最初はまずベランダを回すということ。まだ屋根などは、日本の伝統的な瓦で造っています。しかし、少しずつ西洋に近づいていく。明治初期の段階では、このように試行錯誤といいますが、見よう見まねで、江戸以前の伝統的な建築から、その後近代建築といわれるようになる西洋式の建築へと、歩みを一步一步進めていきました。それが明治初期の段階の建築の歩みでした。

西郷従道邸

同じく明治初期の外国人の関与した邸宅として、レスカスの設計といわれている「西郷従道邸」があります。もともとは、東京の上目黒に建っていたものですが、現在は愛知県犬山市の明治村に移築されています。西郷隆盛の弟の従道の邸宅の中の迎賓館として造られたといわれていますが、邸宅と言っていいと思います。ここでも同様に、1階2階にベランダが配されています。その後明治後期に至るまで、ある建築家はベランダというものを好み、自らの邸宅作品に使用しました。その建築家は、ジョサイア・コンドルです。この国際子ども図書館からもさほど遠くない、重要文化財である旧岩崎久弥邸の設計者でもあります。コンドルという人は、日本の文化と風土をこよなく愛し、理解していた建築家でしたので、日本のような気候の中で、ベランダがいかに大事かを熟知し、そして終生好んだわけです。このようにベランダは建物の外と中のあるもので、言ってみれば、日本の伝統的な縁側に近い役割を果たしたわけです。縁側と違う点は、ベランダの場合は、1階と2階の両方に配されるという点です。これによって、直射日光を防げ、真夏の暑い、厳しい日差しを避けながら心地よい生活をするという機

能をもった装置であり、明治初期の近代建築の最初の段階の重要なポイントです。逆に言うと、このベランダが1階2階に回されている洋館があったら、おおむね明治のものであると考えて差し支えないと思います。縁側とは共通するものがあります。ベランダは、なにも日本で発明されたものではなく、ヨーロッパの植民地(アフリカやインド、オーストラリアなどの暑い地域)を経て、日本にもやってくるわけです。そういう暑い地域で暮らす中で生み出されたものですから、日本で生まれたものではありません。けれど、日本には縁側が伝統的にあったので、受け入れる日本にとっても違和感なく定着したと考えることができるかもしれません。今映した縁側の映像は、「漱石、鷗外の家」で、これも明治村に移築されています。夏目漱石と森鷗外が、一緒には住んでいませんが、それぞれ時期を変えて住んだ住宅の写真でした。これまで3点ほど、洋風建築をご覧いただきましたが、それらはいずれも、造り手は西洋の方でした。

築地ホテル館

しかしすでに、明治元年に日本人の手による洋風建築が、この東京に造られています。「築地ホテル館」です。これはおそらく、日本人の手によるいち早い洋風建築と言って差し支えないと思います。築地というのは、居留地があった場所です。江戸から明治という時代の流れの中で、日本が門戸を開いていく。それに伴って入ってくる外国人のために旅館が必要となり、そして造られたのがこの「築地ホテル館」です。日本で初めてのホテルといえます。重要なのは、この「築地ホテル館」は、清水喜助という日本人の手によって造られている。清水喜助は、代表的な建設会社である

清水建設の前身の清水組の二代目です。この清水喜助が、ブリジェンスという外国人技師と組んでというか、ブリジェンスに協力をして造ったのが、「築地ホテル館」です。これは、当時としては洋風建築、西洋建築と言ってもいい存在だと思います。中央に塔が立って、左右対称で、水平性の強められた全体像。こういった性格は、ヨーロッパにおけるルネサンス様式の系譜にあると言っていいと思います。もちろん清水喜助は、ルネサンス様式をきちんと知っていたわけではありません。ブリジェンスがルネサンス建築の形を知っていて、清水喜助という大工の棟梁が、実際に具体的な設計と施工を行って造り上げたのが、「築地ホテル館」です。ここにもやはりベランダがあります。これは住宅ではありませんが、外国人のための旅館です。南側にはベランダを回し、暑さをしのぐ工夫をしています。同時に、水平性が強められ、両側を手前に出すような形、そして中央に塔を立てるといった細かい操作が左右対称性とあいまって、それまでにない、当時としては斬新な西洋建築の形を示したわけですが、しかし興味深いのは、先ほどの「リンガー邸」や「グラバー邸」にしても、技術的には日本の伝統的な技術の延長上に造られていることです。「築地ホテル館」も、実際に建物を築いていくのは、清水喜助率いる日本の大工たちでした。たとえば、屋根の構造などはそれまでと全く同じで、瓦屋根によって造られているし、壁もよく見ると斜めの線が入っていて、なまこ壁という日本の伝統的な左官技術です。こういったすでにある伝統的な技術を用いながら、少しずつ新たな造形に近づいていくという明治初期の建築のあり方を、東京という都市で最初に示したのが「築地ホテル館」です。

第一国立銀行

同じく清水喜助が、今度は一人で造り上げたのが「第一国立銀行」です。これは現在の兜町に建っていたものです。海運橋のほとりに建っていたので、海運橋三井組とも呼ばれた建物です。これは、今まで見てきた幕末から明治初期の洋風建築とまた一味も二味も違っている。というのは、先ほどの「築地ホテル館」も和洋折衷でした。左官技術のなまこ壁や瓦屋根、あるいは、細部に、火灯窓などもありました。一方で、先ほどから何度も申し上げている左右対称性と水平線の強調、塔の配置、そういった西洋建築の形を織り交ぜて造っていました。そこには多分に外国人をターゲットにしたホテルであるということも関わっていたと思います。つまり、日本のエキゾチズムと言い過ぎかもしれませんが、日本らしさというものを、ある部分では意図的に挿入することによって、外国人の旅情を高める狙いが、少なからずあったと思います。現在でも残る「富士屋ホテル」「金谷ホテル」といった古いホテルのほとんどは、実は外国人のために造られたものです。ですから、ほとんどが、どこかしら和洋折衷になっていて、伝統的な装飾などが織り交ぜられているのは、同じような観点で建てられたホテルだからなのです。「築地ホテル館」の場合は、経営上の思惑もあったと思います。

しかしこの「第一国立銀行」は、何より日本人の清水喜助という人物が、独力で仕上げたところが大きなポイントです。先ほどから、少しずつ学んでいくと申し上げておりますけれど、少しずつ、それも自分の目、あるいは、手もありますが、それによって独自に学び取っていくしかやり方がない時代です。もちろん、この帝国図書館を手がけた久留正道や真水英夫という人々は、きちんとした建築教育を受けて、

設計に臨んでいるわけですが、まだこの時代には、そういう教育システムは全くできていないので、一人で、自分の力で、自発的に学び取っていくしかありませんでした。そういう方法で培った西洋建築の形を、ここで、清水喜助は実践しているのです。ですから、これは狙ったというよりも、もしかしたら、図らずもこのような形になってしまったのかもしれない。

ここでは、洋と和というものが、全く大胆にも下と上で分れていて、1、2階は西洋、そこから上は日本という、思い切った和洋折衷ぶりです。1、2階だけを切ってみると、さほど違和感はありません。洋館と言っても差し支えないかもしれないのに、その上に日本のお城を乗せてしまうということです。こういった建物は、日本人建築家が誕生すると姿を消していきます。明治初期の和洋折衷の建物は、擬洋風建築とも呼ばれますが、今東京にこうした擬洋風建築がいくつあるかと言いますと、正確に私が言えるものとしては、東京大学旧医学部の小石川に移築されている校舎で、今は植物園の建物と、慶応義塾大学の中にある三田演説館の二つしかありません。もちろん、関東大震災によって焼けたものも多いですが、それと同じくらい、東京という開発の激しい都市では、こうした明治初期の擬洋風建築はわざと壊されて、その後、石やれんがの建物、当時としては本格的な西洋建築に置き換えられていったのです。

大審院

大工棟梁の清水喜助の建築を二つお見せしましたが、ほぼ同時期の官公庁建築も、おおむね同じようなスタイルで造られていました。一つだけお見せするならば、「大審院」です。当時の官公庁建築は、ほぼ全てが丸の内周辺に建っていて、それも江戸時代の大名邸宅を

そのまま敷地として引き継ぎ、建物だけ変えたようなものがほとんどでした。その中で、「大審院」という建物も、工部省営繕局の設計によりますが、実際に設計を行う技師は、やはり大工棟梁の出身、系譜を継ぐ人たちでした。「大審院」も、全体として、先ほどの「築地ホテル館」のような水平性の強い、総2階の建物で、また、この帝国図書館のようにアーチなどがあります。このへんは西洋の建物と同じです。アーチ窓も、ガラス窓の外にガリ戸、よるい戸ともいう木製の戸があり二重の構成になっていて、これも本格的な西洋建築の形です。しかし一方で、屋根を見ると、入母屋型の瓦です。この屋根の存在感はとても強く、軒から下の西洋建築の形に対して、この伝統的な入母屋型の大屋根が、日本の伝統的な建築の性格を際立たせている。やはり、和と洋の折衷が、明治12年に日本人の建築家が世に出るまでは、日本の都市を彩っていたのです。

泉布観

少し時代を遡り、日本に本格的な西洋建築がどのように導入されたかという、それは、いわゆる「お雇い外国人」たちの手によるものでした。建築だけではなく、数多いお雇い外国人が日本にやって来ますが、建築の世界でいち早く大きな役割を果たした人に、アイルランド出身のトーマス・J.ウォートルスがありました。ウォートルスの造った建築は、東京には残っていませんが、大阪に、造幣寮の応接所として建てられた「泉布観」という建物が残っています。「泉布観」の観という字は、変換ミスではなく、このように書きます。ここで注意してもらいたいのは、建物の形です。まず、1階、2階が全てつながっていて、ベランダが三方に回っている。総2階の三方ベランダ形式です。屋根は相変わら

ず瓦屋根です。このへんは、今まで見てきた初期の西洋建築と同じです。見ていただきたいのは、三角型の破風という部分があり、それを2本束ねた柱が受けている。そして、柱の頭にお皿形の装飾がある。これは非常に重要な点です。その後の日本の近代建築の流れの中でも、重要な位置を占めていく一つの要素です。このお皿形の柱の頭と三角型の破風に注目しておいてください。

銀座煉瓦街

同じくウォートルスが手がけた西洋建築で、もう少し大規模なものは、銀座一体をれんがの街にするという「銀座煉瓦街」計画です。この「銀座煉瓦街」は、日本の都市計画の上でも非常に先駆的で重要なものでした。江戸東京は、なんとと言っても火事の都でした。しかし、近代の幕が開いたのに、火事が起きるたびにまた建て直すという時代ではないし、特に銀座は、築地に居留地もできて近代の中核の都市になるということで、日本政府が、銀座一体をれんがの街並みにしようと思い立ち、そこでアイルランド出身のウォートルスに白羽の矢が立ったのです。ウォートルスが設計して、実際に築かれたこの街並みは、建物全部がれんがで造られているので、火事にも強い街並みが出来上がります。道路は、非常に広い道路をさらに車道と歩道に分けること、今では歩車道分離という当たり前のことを、いち早く明治10年に実現しています。街路樹は、これも今では当たり前ですが、当時初めて生まれましたし、街灯も同様です。こういった、都市の街路や道路の礎が、この「銀座煉瓦街」によって示されたことが、日本の近代建築史を考える上で大きな出来事です。道路に沿って、柱がたくさん並んでいます。これは、いわゆるアーケードとも言いま

すが、雨に濡れずに商店街、煉瓦街を歩くことができるような道です。その道に、全て列柱が並んでいます。この柱の一つ一つの頭に、お皿が付いています。これは先ほどの「泉布観」と同じです。こういったお皿型の頭、あるいは、「泉布観」でいえば、三角型の破風は、日本人の擬洋風建築にはないとは言えないものの、徹底して用いられるものではありませんでしたが、やがて、近代建築の一つの厳密なルールの中心になっていきます。それが明治の近代建築の第2段階になるわけです。

パルテノン神殿

その第2段階というのは、どこに源泉があるかということ、これは、ギリシャです。ギリシャ建築、ギリシャ文明は、紀元前の9世紀から1世紀にかけて発展した文化で、西洋の建築で言えば、ギリシャ、その後が続くローマが全ての源泉になっていると言っても差し支えないと思います。そのギリシャ建築の中でも、殿堂といわれるのが、アクロポリスに建つパルテノン神殿です。このアクロポリスを、建築を志す人間は誰でも1度は訪れるといわれています。このアクロポリスの丘の中で、最もアテネの中心街区から目立つ部分にパルテノン神殿は建っています。このパルテノン神殿は、その後ほぼ二千年におよぶ西洋建築の歴史を決定付け、道筋を決める建築であったと言っても過言ではないと思います。ちなみにこれは、ル・コルビジェというスイス生まれのフランス人建築家で、国立西洋美術館の設計者です。彼は、モダニズムの牽引者であり、ある意味20世紀建築を決定付けた巨匠中の巨匠といえます。彼の拠り所もやはり、パルテノン神殿だったのです。それほどに、このパルテノン神殿は、西洋建築の流れを考える上では、源と言える重要な建物

でした。紀元前の447年から432年、大体この時代に建ったといわれています。重要なのは形です。非常に横長で、野太い柱が何本も並んで、柱の頭にお皿が付いています。先ほどのウォートルスの「泉布観」や「銀座煉瓦街」の柱にあったお皿も、元をたどればここに至るわけです。このギリシャの神殿建築、それに続くローマの建築が、日本の近代建築を考える上で、その源泉になっていたということです。それから、今ではこのパルテノン神殿の屋根は朽ちていますが、ギリシャ建築は石の文化と考えられ、実際間違いはないのですが、早い時期のギリシャ建築の屋根は、木で造られていましたし、パルテノン神殿もおそらく小屋組みなどは木で造られていたと思われます。従って、耐久性の面から石の方が圧倒的に強いので、パルテノン神殿の場合、屋根は落ちてしまっていますが、当初は三角型の屋根が乗っていました。そう考えてみた時に思い出されるのが、「泉布観」です。2本ずつ束ねた柱が三角型の破風を受けていました。その源泉もやはりギリシャ神殿にあるわけです。つまり、日本の最初の段階の造り手である清水喜助といった人々は、見よう見まねで試行錯誤しながら一步一步進んでいった。それと平行して、招かれた外国人というのは、きちんとした西洋建築の流れを知っていて、その源がギリシャ、ローマにあることがわかっていたので、早い段階から柱が並ぶ列柱や、柱頭の飾り、あるいは、三角型の破風といったものを造ることができたということです。

古典建築のオーダー

そして、ギリシャ、ローマ建築が、西洋の建築の源であることはおわかりいただけと思いますが、その源であるギリシャ、ローマの建築をつかさどるルールがあります。それはなんと

いっても柱です。その柱には、オーダーといわれるルールがあって、このオーダーを知っていると、知らないとは大違いです。先ほど申し上げたように、明治12年に、辰野金吾、あるいは、片山東熊といった日本の建築家が誕生しますが、彼らはこうしたギリシャ、ローマ建築のオーダーをきちんと学んでいるので、彼らが造り出す建築にはこうしたルールが生きています。しかし、それ以前のいわゆる擬洋風建築には、こういったルールは適応されませんでした。それは、知らなかったからです。このオーダーが、きちんと使われているかないかによって、明治の第1段階と第2段階を、はっきりと分けることができます。オーダーというのは、柱の寸法、あるいは形に基づいた構成原理です。オーダーには3種類あり、ドリス式、イオニア式、コリント式です。明治期から昭和初期までに全国的に建てられた銀行建築など、重厚な柱の並ぶ近代建築が、今でも残っています。とくに地方などに行くと、数多く現存している。それらの柱の頭を見ていただくと、必ずどれかになります。それほどこれは厳格なルールです。ローマ時代になると、ドリス式の系譜にあるトスカーナ式もあみ出されますが、これは一緒に考えても差し支えないと思います。先ほどの「泉布観」や「銀座煉瓦街」のシンプルなお皿の頭というのは、ドリス式あるいはトスカーナ式を採用していました。ウォートルスは、そのへんはさすがにわかっていた、これに従って建物を造ったのです。一方で、同時代の日本人は、それを知らないで、日本人が手がけたユニークな洋風建築の柱の頭というのは、非常に個人的で、逆に言うと面白いです。建物によって一つ一つの違う装飾が魅力です。どちらがいいというのではなく、それぞれの味わい、見方があるということです。やはり、ギリシャの神殿で、ア

テネ・ニケ神殿の柱の頭は、渦巻き型のイオニア式です。一方、こちらの部分の柱はドリス式です。建物によってオーダーを使い分けるといふやり方が、西洋建築のギリシャ、ローマから、そしてルネサンス、バロックという近世の建築に至るまでの長い歴史の中で、一貫して流れる、最も重要な原理です。

古代ローマの建築

ギリシャの建築を見てきましたが、この帝国図書館を考える上では、ローマという時代が、おそらく重要な意味を持つのではないかと考えます。ローマはギリシャを征服しましたが、ギリシャ建築という先駆的な文化を滅ぼそうとはせず、むしろ受け継いだのです。ローマという時代は、そのすばらしい建築文化を継承し、さらに発展させました。そして圧倒的な英知と技術の結集によって、世界の建築史上、飛躍的な展開を果たしました。ローマがギリシャの建築を、基本的には受け継いでいるというのは、メゾン・カレという、南フランスのニームというローマの植民都市に造られた神殿をご覧いただくとおわかりになると思います。基本的には先ほどのパルテノン神殿のような造りです。非常に水平性が強く、列柱が立っていて、柱の頭には、3種類のオーダーのうちコリント式が乗っています。また、三角の大屋根を受けるという形式やギリシャ神殿の形式そのものを受け継いでいます。そして、ローマという建築文化は、装飾をより豊かにして、柱ももっと腰高のか細い柱に少しずつ変化させて、全体も、大きな基壇の上に乗せて、地に這うようなどっしりとしたギリシャ建築から、少し上昇性を持った繊細な形に変えています。しかし、構成の原理としては一緒です。

水準原点標庫

こうしたギリシャ、ローマの建築文化が西洋建築のその後を決定づけるのですが、ギリシャ、ローマの建築がそのまま日本に入ってくるかというと、それはそんな単純なものではありません。まず、時代が違います。ローマ時代は紀元前で、日本に西洋建築が入ってくるのは19世紀ですから、その間1800年近い時代があります。ギリシャ、ローマが、その後の西洋建築の流れの中で展開していったものを、19世紀に日本は受け入れます。このギリシャ、ローマの建築を直接援用したものは本当に珍しく、日本では「水準原点標庫」が永田町にあります。これは、ローマ神殿をそのまま縮小したような非常に珍しいものです。ここは列柱ではなく2本の柱ですが、このまま柱が並んでいけば神殿になります。そしてそれが三角型の屋根を受け、柱の頭はドリス式のシンプルなお皿であるということです。これが、ギリシャ、ローマをそのまま輸入、採用という非常に珍しい例です。

ルネサンス様式

日本の近代建築への影響といいますが、日本で採用された様式というのは、もっと後のものです。明治の建築の基本となったのは、大きくはまずルネサンス様式です。ルネサンス様式とは、15、16世紀にイタリアを中心に広まった様式で、古典復興という性格を持っています。古典というのは、ギリシャ、ローマのことです。復興というからには断絶期があったわけです。それは中世です。ヨーロッパでは、ギリシャ、ローマという偉大な古代の建築文化があったのですが、その後途絶えます。その途絶えた中で生まれた様式が、ゴシック様式です。その前に、ロマネスク、ビザンチンがありますが、世界的に趨勢を振るって、大きな影響力を持った

のが、ゴシック様式です。それまでのギリシャ、ローマの神殿建築は非常に強い厳格な規範、オーダーのように厳しいルールによって建築の形が決められる。そして、なんといっても、水平の美学が、ギリシャ、ローマの建築の中核にあったわけです。それに対して中世のゴシック様式は、垂直の美を求めていきます。柱の装飾にしても、オーダーというルールに縛られるのではなく、それぞれの石工、建物を一緒に造り上げていく職人が自らの創意で決めていくような彫刻を理想としました。ですから、フランスのノートルダムやシャルトルやランス、あるいは、最終的に完成したのは近代ですが、ドイツのケルン大聖堂といったゴシックの教会を実際に訪れてみると、彫刻の多様さに驚きます。それは、それまでのギリシャ、ローマが徹底的に厳守してきた規範に対する、アンチテーゼの表れです。

しかし、ルネサンスという時代が、もう一度ギリシャ、ローマの規範を呼び戻すのです。あまりにも自由になりすぎた建築に対して、もう一度ギリシャ、ローマの厳しく、しかしすばらしい規範に則った建築文化を復興しようとしたのが、ルネサンスです。ですから、美意識は、ギリシャ、ローマそのものです。それは、水平性の強調と柱に基づく全体構成です。先に述べたように、ギリシャ、ローマの基本原理は、オーダーと呼ばれる柱にありました。柱が並んでいくことで、建築は成り立っていました。ルネサンスは、ゴシックという時代を経て、建築の技術が発展しているのです。基本的に、壁によって建物を構成するところはゴシックと変わりませんが、そこにギリシャ、ローマの柱の美学、文化を入れ込んで、もう一度復興させるので、ルネサンス建築には、壁の中に柱が現れてきます。より具体的に言うと、ギリシャ、ローマでは、柱が独立し

て何本も立っていましたが、ルネサンス建築になると、柱と一体化した付け柱やピラスターと呼ばれるような、壁であるけれど形は柱であるという要素が重要視されるようになります。

日本の明治の建築は、これをモデルにしたと言ってもいいと思います。この帝国図書館にしても基本的にはそうです。この壮大な全体像、外観を見ますと、非常に巨大な柱が並んでいてアーチを築いているけれど、柱は独立していません。壁と一体化しています。それは、ルネサンス様式の系譜にあるからです。このパラッツォ・ピッコロミーニは、典型的なルネサンス様式の邸宅で、れんがで造られた大きな壁の中に柱が幾つも埋め込まれて、取り付けられている。そして、柱の頭は、ドリス(トスカーナ)式、あるいはイオニア式、あるいはコリント式というような、三つのオーダーを使い分けて重ねているのです。ギリシャ、ローマの偉大な建築文化を呼び戻しながら、壁による多層構造の建築という形で昇華させる。これがルネサンス様式の特徴と言っていいと思います。ミケランジェロのパラッツォ・ファルネーゼという建築も、やはりルネサンス様式です。このパラッツォ・ファルネーゼの外観には、柱型は並んでいません。この点は、先ほどのパラッツォ・ピッコロミーニという典型的なルネサンス様式の住宅とは少し違っています。通常であればここに柱が並んでいてもいい。しかし、その代わりに一つ一つの窓に柱があります。これは何を意味しているかというと、この窓一つ一つが神殿であるということができるわけです。ギリシャ、ローマの建築の中核であった神殿を、凝縮して一つの窓にしたのです。ですから、ルネサンス様式の窓には必ずと言っていいほど三角の屋根のような形が付くのです。これは、ギリシャ、ローマの神殿の屋根を意味しています。これは、構造的にはなくて

もいいのですが、それを柱が支えます。こういう付け柱というのが、ギリシャ、ローマの系譜にある。この三角の部分を、正しくは、ペディメントといいます。日本語では、破風と訳されます。このペディメントを持つというのが、ルネサンス様式、あるいは、それに続くバロック様式の重要な特徴です。同じパラッツォ・ファルネーゼの中庭に面したところを見ますと、先ほどの建物と同様に、柱が出てきます。これは典型的なルネサンス様式の構成です。壁と一体化した柱が規則正しく並んでいく。この規則正しくということが重要で、規則を外してしまうと、ギリシャ、ローマが怒るわけです。ギリシャ、ローマというのは、徹底的な規範ですから、規則正しく並んでいく、等間隔で並んでいくということが、ルネサンス様式の重要なポイントです。

ルネサンス様式の建物は、たくさんありますが、最もお馴染みのものは、東京駅です。丸の内の方から見ると、非常に水平性が強く(世界一水平性が強い駅なのですが)、その壁には柱が等間隔に並んでいます。記憶にない方は、帰りに寄っていただければ簡単にわかると思います。特に、2階の部分に柱が規則正しく並んでいます。東京駅は大正初期の建物ですが、性格的には明治建築に含めても問題はないと思っています。そういった明治の近代建築は、ルネサンス様式が非常に大きな力を持って影響しました。ヨーロッパ経由で伝わったということです。有名なものとしては、ローマのサン・ピエトロ大聖堂です。これは、巨大なドームが特徴で、この巨大なドームを好んで用いるのは、ルネサンス様式の次の時代のバロック様式ですが、性格的に、先ほどのルネサンスの形を受け継いで、柱が並んでいて、そしてその間を規則正しく同じ形の窓が埋めていきます。やはり、規則正しさが、ルネサンスの特徴です。日

本の明治の近代建築を考える上で、まず頭に置かなければいけないのは、ルネサンスであるということ。そのルネサンスの元には、ギリシャ、ローマがあったということです。

ゴシック様式

実はもう一つ明治の重要な様式として、建築家たちが学んだのが、ゴシック様式です。つまり、西洋の流れで言えば、ギリシャ、ローマから一回流れを断ち切って独自の展開を遂げたゴシック様式。12世紀から15世紀まで栄える様式です。それを当時の、明治12年に卒業する日本の建築家たちは学びました。誰を通じてかということ、ジョサイア・コンドルです。ジョサイア・コンドルが工部大学校造家学科という今の東大建築学科の前身で教えた様式は、ルネサンスとゴシックでした。同時代のヨーロッパでは、もちろん、ルネサンス様式も過去の様式です。ゴシック様式はさらに過去の様式ですから、それをそのままコンドルが、同時代のものとして教えたのではなく、19世紀当時は、ヨーロッパでは過去の様式であるルネサンスやゴシック、その他のスタイルを混ぜこぜにした折衷様式という時代でしたので、正確にはその折衷様式をコンドルは体現していて、それを日本人に教えたのです。コンドルから教えを受けた建築家たちの設計した建物は、ルネサンスと、時にゴシック的な要素が混ざったりする、あるいはバロック様式が混ざったりしますが、やはり中心的な骨格となったのはルネサンス様式だったといえます。

そして、ルネサンス様式と平行して重要なものとして、明治に輸入されたスタイルが、先ほど少しお話した垂直線を重んじるゴシック様式です。フランスのランス大聖堂というゴシックの教会は、天を指すような垂直性を持っています。

それから、アーチもヨーロッパで生まれた建築の要素ですが、このアーチを飛躍的に発展させたのがローマです。ゴシック様式もローマのアーチは受け継ぎます。しかし、ゴシック様式ならではの形に変えてしまいます。尖ったアーチに変えるのです。垂直性を重んじるゴシックは、ローマの半円型のアーチを尖らせたのです。全部のアーチが尖っているのがおわかりになるでしょうか。これはわりと見分けやすいです。尖ったアーチがあったら、ゴシック様式的だと言って、間違いはありません。そして、吹き抜けの大空間も、ゴシック様式の大きな特徴です。上へ、上へと延びていく空間構成が、それまでの横へ、横へと延びていくギリシャ、ローマの建築の美意識に対して、全く対照的なものでしたが、その両方が、ヨーロッパでは過去の様式として成熟し、混在していて、それを日本人はよく受け継ぎます。余談ですが、ケルン大聖堂は、1248年に建設が始まり、出来上がったのが1880年です。この間640年です。ですから、着工から竣工まで600年以上かかった、世界的にも例のない建築、恐るべき建築です。中世のゴシック様式によって建てはじめられながら、最終的には近代建築であるという、非常に面白い建物です。途中、長きにわたって建築が中断されていたこともあって、再開されて出来上がったのが19世紀です。中断期は、なんと300年にも及びました。その間、計画が立ち消えにならずに、持続したところがすばらしいところ。近代になって完成されたケルン大聖堂ですが、ゴシック様式の特徴である天を指すような外観と、高く伸びていく吹き抜け空間、そして尖りアーチというゴシック様式の特徴を見事に伝えています。

凌雲閣

日本に戻りますが、先ほど言ったように、ルネサンス様式がまず大事で、そしてゴシックも学んだと言いましたが、ゴシック様式本来の、天を指すような垂直に延びていく建築が、明治に建ったかという、それはほとんどなかったと言えます。なぜかと考えると、それは技術だと思えます。ゴシック建築は、あのような巨大な空間が全て石、れんがで造られている。つまり、「積み木細工」であれだけの吹き抜け空間を造るということです。しかし、明治という時代は、西洋建築が始まって間もないので、無理なのです。しかしそんな中でも、ある意味ゴシック的な建物と言えるのは、浅草十二階と呼ばれた「凌雲閣」(写真資料あり)です。浅草に建った12階建ての高層ビルで、れんがで造られました。これは、当時としては画期的も画期的です。雲をつくような高さなので「凌雲閣」です。おそらく、垂直性に基づくゴシック的な建物というのはこれくらいしかないと思います。でも、やはり無理があって、この「凌雲閣」は壊れてしまいます。それは言うまでもなく、日本は地震国だからです。関東大震災という、すさまじい破壊力を持った地震によって、このれんがによる楼閣は崩れ去って、解体されます。しかし、一時期であれ東京に建っていたゴシック的な明治の建物を挙げろといわれれば、この「凌雲閣」がそれに当たるかもしれせん。参考ですが、大正末から昭和にかけて、やっとゴシックのゴシックたる建物が生まれます。大正14年の東大の安田講堂は、まさにゴシック様式の垂直の美学を端的に表現しています。だんだんと稜線が上がって行って、中央で天を指すような、典型的なゴシックスタイルです。しかし、時代は大正14年を待たなければならなかったということです。関東大震災を経て、鉄筋コンクリート造、ある

いは、さらにそれを強化した、鉄骨鉄筋コンクリート造という構造が普及して、やっとこうした巨大建築が日本でも可能になるということです。大隈講堂も同様です。余談ですが、有名な近代建築家ガウディのサグラダファミリアもやはりゴシック様式です。都庁もゴシック様式の美を現代的にアレンジしたデザインです。

新橋停車場

ルネサンス様式が、明治の建築を統括する重要な要素であるという例を見ていきます。いち早いものは、ブリジェンスの「新橋停車場」です。これは、日本最初の駅舎です。一つ一つの窓が、ルネサンス建築に見られたような神殿のような形をしています。ペディメントという破風の部分を、2階の部分は全部三角に、1階部分はくし型にしています。1階と2階で、ペディメントの形を分けていますが、基本的には一つ一つの窓が「神殿」を構成しています。現在は、汐留駅として復元されました。ブリジェンスは、先ほどの「築地ホテル館」を造った外国人です。それから、お雇い外国人が、東京を中心に次々に建築を造っていきますが、そういった建築のいずれもがルネサンス様式の壮大なものでありました。ドイツの建築家であるエンデ・ベックマンたちが、東京に計画した「官庁集中計画」は、皇居から幹線道路を延ばして、そこに諸官庁を集中して置いて、壮大な、パリのような都市を形作るという計画です。先ほどの「銀座煉瓦街」と同じく、井上馨という外務大臣が中心になって計画を進めたものですが、井上馨自身が失脚し、この「官庁集中計画」はほとんど実現されずに終わりますが、そのうちの二つの建物が実現して、建てられて、現在一つ残っています。それは法務省です。当時は司法省という建物です。これは、ドイツのル

ネサンス様式の明治時代のものとして貴重です。同時に「官庁集中計画」という壮大な計画の生き残りでもあるということです。やはり同様に柱が並んで、ここではベランダ部分が独立柱になっていますが、両翼の2階部分ではアーチ型のペディメントを持った柱が並んでいます。

ニコライ堂

明治に建ったもので、少し変わり物が「ニコライ堂」です。こういったものも造られて今に残っています。これは、今まで言っていた系譜とは少し違い、ビザンチン様式といって、ヨーロッパでいうとゴシックより昔の様式を基本にして造られたものです。これは、今まで言ってきたギリシャ、ローマに端を発して日本に来て、そして帝国図書館に至るルネサンスを基本とした流れとは少し外れる様式で、ロシア正教の教会です。ロシア人が元設計を行って、コンドルが具体的な設計を行ったものです。関東大震災で、ドーム部分が焼けてしまい、今では少し形が変わっています。この建築はルネサンス様式ではありません。コンドルのいち早いルネサンス様式としては「上野博物館」という建築があります。これは、坂本先生のお話にも出てくると思いますが、現在の東京国立博物館の本館の位置に建っていたもので、まさに水平性の強い全体像と、規則正しくアーチ窓が並んでいく、柱が壁と一体化して並んでいくような、ルネサンス様式の典型的なものです。

鹿鳴館

「鹿鳴館」という有名な建物も、やはりコンドルのルネサンスです。柱が並んで、アーチがその間を埋めていく。「鹿鳴館」で、面白く、興味深いのは、ベランダが回っているということ

す。このへんがコンドルらしいところです。最初に申し上げたように、明治最初期から日本で普及するベランダを、コンドルは重要視して、自分の作品にずっと使っていく。この欧化政策の象徴である「鹿鳴館」も同様でした。余談ですが、「鹿鳴館」の門は和風だったというのは、意外に知られていません。江戸時代の大名邸宅、旧島津家上屋敷門をそのまま使って造られていた。ですから、「鹿鳴館」というのは、欧化政策の象徴で純ヨーロッパだと思いがちですが、実はけっこう考え抜かれていて、門は大名屋敷の門で、そこから和洋折衷の庭を通過して、ルネサンスの洋館に至るという巧みな演出がされていました。日本からだんだん西洋へと演出がされていました。残念ながら現存していません。

岩崎久弥邸

今あるもので、コンドルが一人で手がけた最も古いものは、「岩崎久弥邸」です。この国際子ども図書館からさほど遠くない邸宅なので、講演が終わってから行かれても間に合うかもしれませぬ。コンドルの「岩崎久弥邸」は、イギリスの初期ルネサンスであるジャコビアン様式です。柱が壁にくっついて並び、ペディメントを持った窓が埋めていく。そこにコンドルは、ゴシック様式の塔を付ける。これは、コンドルの得意技です。ルネサンス様式だけでは終わらずに、ゴシック様式の塔を立てていくことをアクセントにする。コンドルが生きた19世紀のヨーロッパの、一つの潮流でもあったし、コンドルが好んで発揮した手法でもあります。南側にはベランダが回っています。コンドルは、非常に優秀な建築家として、イギリス時代から名をはせていましたから、オーダーの使い方も巧みです。1階部分をトスカーナ式、ドリス式にして、2階部

分をイオニア式にしています。きちんとしたヨーロッパの古典のルールに則りながら、それを1階部と2階部とに分けて、柱の形も2階の部分には輪っかを巻くなどして、細かい操作を加えながら、この「岩崎久弥邸」を構成しています。

開東閣

コンドルの作品で明治の洋館は、比較的東京に残っています。「開東閣」は、品川駅近くにある三菱の倶楽部です。日常的に公開はされていませんが、現存しています。やはり「岩崎久弥邸」と同様に、柱が並ぶルネサンス様式で、ベランダを持ち、そこに塔屋を加えてアクセントとする。塔の感じがゴシック的なアクセントになっています。日本の明治の建築の骨格であるルネサンスとゴシックを巧みに混ぜて構成しています。

日本最初の建築家たち

そして、明治12年に日本人建築家が生まれています。辰野金吾、曾禰達蔵、佐立七次郎、片山東熊という4名の建築家が、コンドルの教えを受けて卒業します。彼らは、コンドルから学んだルネサンスを基本とするヨーロッパの建築の造り方を、自分の腕で試みて、世に問うていきます。しかし、それとは少し違う流れの人もいて、山口半六という人は、独自にフランスに渡って、建築を学び、帰ってきます。そして手がけたのが、「旧東京音楽学校奏楽堂」です。この国際子ども図書館のすぐ近くにあります。学んだ経緯は違うにしても、やはり、建物の骨格となるのは、横に伸びる全体像と左右対称の形、そして一つ一つの窓に屋根が乗る。ギリシャ神殿に端を発するルネサンスであることには変わりはありません。「日本銀行本店」を代表とする明治建築の骨格というのは、そういうも

のです。厳格な左右対称性です。列柱が並び、窓も、何度も言っているのと同じことです。中央にドームを乗せるのは、いわばルネサンスに続くバロック様式を感じを少し出しているからです。

バロック様式

明治の建築は基本的にルネサンス。そしてそこに、ヨーロッパではルネサンスの後に流行するバロックという様式があります。基本的な骨格はルネサンスと変わりませんが、巨大なドームや、柱をさらに巨大にして、3階建てであれば、3階分の柱をぶち抜くとか、あるいは柱を2本束ねるといった手法を用いて、よりダイナミックな効果を生もうとしたのがバロック様式です。この明治の建築家たちに教えられた様式の中には、バロック様式も含まれていました。それに学んだ日本人建築家も、時にバロック的な手法を試みます。先ほどの「日本銀行本店」も同様で、同じことを妻木頼黄^{よりなか}という建築家は「横浜正金銀行本店」(写真資料あり)という、今の神奈川県立歴史博物館という横浜にある建物で試んでいます。柱を2本束ねて伸ばす、ドームを乗せるといったことをしています。「横浜正金銀行本店」を設計した妻木頼黄^{よりなか}は、辰野金吾の宿命のライバルといわれた建築家です。彼は、工部大学校からアメリカへ行き、帰ってきてからはドイツへ行き、建築を学んで帰ってきたので、辰野金吾らの流れとは、少し違った建築を造り、特にこのバロック様式の壮大なドームや大オーダーと呼ばれる長い柱の効果を巧みに発揮しました。

慶応義塾図書館

明治のゴシック様式の例を挙げるなら、東京に「慶応義塾図書館」があります。しかし、これ

はヨーロッパの教会のような、天を指すようなゴシックではなく、どちらかという、まだ水平性が強いです。そこに、垂直性を持った塔を、非常に強いアクセントとして与えて、そしてアーチも尖らせません。このようにしてゴシック様式の特徴を巧みに表現しているものとして、この「慶応義塾図書館」を明治の近代建築として挙げておきます。

赤坂離宮

なんといっても、誰もが、明治建築の集大成として褒めたたえるのは、「赤坂離宮(現迎賓館)」です。明治という時代が、清水喜助という棟梁が手がけた「築地ホテル館」から始まって、たかだか40年で、この本格的な宮殿建築を日本人の手によって造り上げるに至るわけです。これは本当に想像を越える、恐るべき集中力、凝縮力だと思います。「赤坂離宮」は、ルネサンス様式の特徴である列柱とペディメントを持った規則正しい窓、それに加えて両側を曲線状に手前に伸ばす、これはルネサンスの後のバロック様式が好んだ手法ですが、こういう手法を、非常にダイナミックに織り交ぜて、スケールの大きな宮殿に仕上げられています。

東京駅

先ほどちょっと触れた「東京駅」は、全長が443メートルで、世界最長の駅です。全体は、やはり横に伸びていくルネサンス様式です。そして、コンドル譲りの垂直線のアクセント、「岩崎久弥邸」に見られたものと同じですが、それを小気味よく効果的に入れています。おそらくこれは、これだけの壮大な駅を全部ルネサンスだけでやってしまうと、あまりにも退屈になるので、要所要所にゴシックのような垂直線を加えていくという、非常に上手いやり方です。

先ほどの「日本銀行本店」の時点では、辰野金吾はまだ硬いです。ほぼ同時代の「横浜正金銀行本店」に比べて、やはり「日本銀行本店」の造形というのは、あまりにも重々しく、堅苦しいです。辰野金吾が晩年に手がけた「東京駅」において、明治 12 年以来、自分の中で展開させてきたルネサンスにゴシックを織り交ぜて建築を造り上げるという基本は引き続き守りながらも、外観に赤レンガと白い石を織り交ぜて華やかな対照をもたらすという、辰野式と呼ばれる独自の作風を取り込みつつ、非常に華やかな、退屈感のない駅舎に仕上がっています。ですから、スタイルとしては明治時代の系譜にあって、つまりルネサンスを骨格としながら時にゴシックも混ぜるという系譜上にあるので、大正 3 年の建築でありながら、性格的には明治建築の集大成、あるいは、辰野金吾という建築家の集大成と言えるかもしれません。当初、「東京駅」は 3 階建てでしたが、大戦の空襲で燃えて、2 階建てに変わり、現在はドーム型の天井で親しまれています。それが近い将来、もう一度 3 階建てに戻されます。内部も建築当初の天井に戻されます。逆に言うと、このドーム型の天井は、そろそろ見納めです。今のうちにご覧いただいていた方がいいと思います。

帝国図書館の特色

そして、栄光の建築にようやく至るわけです。今まで長々と西洋建築の話をしてきたわけですが、おわかりいただいたように、日本人が、基本として学ぶべき対象としたヨーロッパの建築は、ギリシャがあって、ローマがあって、ゴシックを経てルネサンスがもう一度甦るという流れです。具体的な手法としては、柱があって、その間にペディメント、あるいはアーチを持った窓がある形式でした。そして、水平性が強く、

左右対称であるという共通性を持っています。しかし、この帝国図書館は、そういう中であっても特徴が少し違う感じがします。それは何かということを考えていわけです。細かい特徴については坂本先生にお話いただくことになると思いますが、私は、最後に、明治の建築の流れの中で帝国図書館の持つ特色を考えます。まず、この帝国図書館を私が初めて見たのは、恥ずかしいことに大学に入ってからです。東京国立博物館からこちらへ来る用事がほとんどなかったのに引き返していましたが、何かの機会にこちらへ歩いて来る時があり、この帝国図書館の外観を見て圧倒されました。それは、一言で言うとスケールの大きさです。アウトスケールという言葉がありますが、本当に大きすぎるくらい大きい。巨大な感じがします。圧倒的な存在感です。それは、ルネサンスの系譜の中にあっても、特殊な形式だと思います。ではその源泉は何かといえますと、ローマに建てられた凱旋門に至るといえることができます。凱旋門というのは、戦勝を記念して建てられる記念的な建物ですが、このローマ時代の凱旋門のスタイルがヨーロッパで復興する時があります。ナポレオンの時代です。19 世紀初頭に「カールゼルの凱旋門」という建築が、パリに建ちますが、これは何を基本にしたかという、先ほどのローマの凱旋門です。ここで、ローマが再び呼び戻されます。はるか、ルネサンス、バロックを経たローマではなく、ローマそのものが呼び戻されたのです。これを、建築様式では、アンピール様式や帝政様式という言い方をします。ローマの巨大な建築スケールと華麗な装飾を、再び直接的な形で復興する。その大きな特徴は、なんといっても巨大なアーチにあります。アーチというのは、ローマという偉大な英知と技術力の象徴でありました。偉大な文化の象

徴であるローマのさらに象徴がアーチであり、それを呼び戻したのがアンピール様式です。「エトワールの凱旋門」も同様です。

この帝国図書館において採用されたルネサンスは、特にアンピール様式といわれていますが、どこにその由縁があるかという、やはりこの巨大なアーチです。アーチの中でも、半円でもなく尖りアーチでもない、セグメンタルアーチというもので、半円の下の方で切るようなアーチです。そのセグメンタルアーチが、1階から3階までを通して突き抜けるという圧倒的なスケール感を与えるのです。通常のルネサンス様式であれば、3階建てであったら、1階のアーチがあって、2階のアーチがあって、3階のアーチがあるはずですが、ここでは1階から3階までを巨大なアーチにして並べています。なぜ、アンピール様式が採用されたかという、全くの推論ですが、ローマというのは英知の象徴です。そして、ギリシャという偉大な過去の先達の文化を吸収して、それに終わることなく自らの文化としてさらに高めていった、それがローマという時代の偉かさです。フランスにおいて、ローマが復興するのは、そういった背景があったからだと思われれます。つまり、この帝国図書館が担うものは、その古きものの偉大な文化であり、そして、それをさらに高めていくという発展の象徴としてアンピール様式が採用されたとするならば、この建築は、まさに明治建築の、偉大な時代の集中力の構図そのものです。つまり、江戸から明治というのは、あまりにも激しい展開で、全く別の文化を取り入れた。しかしそれを、40年余という短い時代の中で、瞬間に摂取し、しかも独自にその後に展開していくような時代です。その象徴であり、また、図書館という機能が、今後担うべき偉大な過去の文化の摂取と展開の象徴であったとするなら

ば、この帝国図書館は、まさに栄光の建築といえることができます。つまり、凱旋門に課せられたものは、栄光の建築としての役割だったのですが、それと同様の思いが、この帝国図書館におけるアンピール様式の採用の背景にあったかもしれない。

さらに重要なのは、「現代性」だと思います。この国際子ども図書館の再生については、近代建築保存の金字塔と呼んでいい。それは、過去の明治建築を継承しつつ、最新の建築文化をそこに織り交ぜて、未来へと継承していくということです。ただ、古いものをそのまま残すのではなく、また、古いものを放棄、破棄して、全く新しいものに変えてしまうのでもない。古いものを摂取しながら、敬意をはらって継承しながら展開していくということです。まさに、これまでにない再生のあり方が、この国際子ども図書館によって示されました。それもまた、ローマの偉大な建築文化が思い起こされる感じがします。明治時代という恐るべき集中力で西洋建築の摂取と展開に臨んだ時代の到達点を示す金字塔として、少なくともこの帝国図書館は存在します。また、今回の再生も近代建築保存の金字塔として、今後も語り継がれていくであろうと私は思います。それが「栄光の建築」と呼ぶ^{ゆえん}由縁です。

時間がきましたので、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。